

特別講演 イランのバラ香料産業と野生植物

岐阜県立国際園芸アカデミー・上田善弘

〒509-0251 岐阜県可児市塩 1094-8 ueda-yoshihiro@horticulture.ac.jp

なぜイランなのか

イランを訪ねたいと思うようになったのには、ある記載による。バラの栽培の始まりは香料用であり、紀元前 12 世紀には古代ペルシャのマジ僧族やメディア王国の拝火教徒により宗教的な儀式でバラの香りを利用し、そのために栽培をした (C.C.Hurst, 1941) ということと、その後、イランで盛んに香料を採取するためにバラが栽培され、アラブ人によるイスラム教の普及とともに、イランから中近東、北アフリカに香料バラの栽培が伝えられた (I.Irinchev and A.G.Ognenski) ということによる。

ところが、イランは核開発疑惑によるアメリカを主とする海外からの経済封鎖などから、簡単には入国できない国である。訪れたいという希望があるものの、なかなかかなわないと思っていた。しかし、4 年前に岐阜でバラの国際会議を開催したことがきっかけで、訪問する機会が意外に早くめぐってきた。この国際会議にイランから数名のバラの研究者が参加され、まさに、香料用バラの研究者であった。この繋がりを逃がすまいと、会議開催の翌年 (2010 年) にイランを訪問した。直前までビザの取得に奔走したが、何とか 4 月の終わりから 5 月上旬に訪問することができたので、その様子を報告する。

イランの香料バラの生産とその歴史

イランの主な香料バラの産地は、中部のカーシャーンと南のシーラーズである。今回、訪れたのはシーラーズで、岐阜にも来られた、シーラーズ大学のコシュ・クヒ教授を頼ってのことである。シーラーズでは、教授の専攻生が滞在中、案内してくれた。シーラーズは首都テヘランの南、約 600km、ペルシャ湾に沿ったザグロス山脈中、標高 1600m のところに位置する。エジプトまでも支配した巨大な王朝、アケメネス朝はこの地方から起こった。

まず、シーラーズに近い、古い香料バラの産地、メイマンを訪ねた。メイマンはシーラーズの南、約 100km にある。この地方はブドウの有名な産地でもある。早速、香料バラの生産とローズオイルとローズウォーターの生産会社を訪問した。訪問した年の春が例年になく暑かったようで、香料バラの開花は最盛期を過ぎていた。イランで香料を生産するバラはダマスクローズ (*Rosa × damascena*) である。例年の気候では、花の最盛期は 5 月中旬から下旬とのことであった。花摘みは、現在、一人の労働者が一日で約 20kg の花を摘むが、最盛期には約 70kg もの花を摘むとのことであった。花摘みの時間は早朝 5 時頃から精油の収量が落ちる 10 時頃まで行われる。ローズウォーターの製法は水蒸気蒸留法で、一釜に 40kg のバラの花と 80 リットルの水を入れ加熱、蒸留するという。高品質生産には 1kg の花に対し、1 リットルのローズウ

ウォーターが得られるように蒸留するようである。現地で聞いたところ、この地域でローズウォーターの生産が始まったのは、2000年ぐらい前からだという。文献でも相当古くから香料バラ生産が行われていたとのことであり、紀元前から行われていたのは間違いないであろう。

現地では新しいローズの生産会社も訪問した。この会社では、バラだけでなく、フェンネル、ミント、カモミューナなどのハーブのウォーターも生産されており、20種類の植物の蒸留が行われていた。この生産会社のバラはシーラーズから約300km東のダラブの標高の高いところで栽培されているものを利用している。ダラブはシーラーズを含むファールズ州最大の産地で、4000haもの生産面積があるという。

また、イランでは、ローズウォーターはダマスクローズだけでなくムスクローズ (*R. moschata*) からも生産されている。実際、いたるところでムスクローズの大木を見ることができ、街路樹としても利用されていた。

このようなイランでの香料バラであるが、専らの利用は、ローズオイルよりローズウォーターが主である。健康飲料、化粧水、食品のフレーバーとしてローズウォーターが多用されているようである。それだけの需要があるため、ローズウォーターの専門店があり、販売単位も大きく、1リットルから3リットルボトルで売られていた。

イランの野生植物

イランの国花はバラであるが、バラと同様に重要な花はチューリップである。チューリップといえば、トルコが有名で、ヨーロッパにはトルコから伝えられた。そのトルコと同様に古くからイランではチューリップが栽培されており、その歴史は13世紀まで遡ることができる。意外に知られていないことであるが、イランの国旗の真ん中に描かれているのは、赤いチューリップである。今回はイラン北東部のマシュハド大学を訪問し、幸いにも大学の学生を対象とした野外植物調査に同行させていただいた。場所は、マシュハドから西に約300km、北イランの山岳部で、この調査でチューリップの野生種を見ることができた。すばらしい赤花の種で、種名はチューリップ・モンタナ (*Tulipa montana* = *T. wilsoniana*) である。礫の多い乾いた山の斜面に群生せず広く散在し、点々と咲いていた。標高は約2000mで、周辺には高木はなく、まばらに低木が生え、エレムルス属、アイリス属、アリウム属などの球根花きを多く見ることができた。

バラの野生種については、乾燥地の珍しい野生種、ロサ・ペルシカ (*R. persica*) やロサ・ヘミスフェリア (*R. hemisphaerica*) を見ることができた。また、イランはラナンキュラスの故郷でもある。野生状態のものを見ることはできなかったが、公園や街の花壇に野生種に近い、小輪一重のものが、ずいぶん利用されていた。花色も黄色からオレンジ、赤、白と多彩な花色が冴えていた。